九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

景観にさぐる中世 : 変貌する村の姿と荘園史研究

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

https://hdl.handle.net/2324/21647

出版情報：1995-12-20. 新人物往来社
バージョン：
権利関係：

はじめに

「学問とは大学の研究室の中にのみあるのではない。真の学問は私たちの身のまわりの生活の中にある」と主張したのは在野の地理学者三澤勝衛であった。「村の歴史・町の歴史・工場の歴史」を提唱して、耕地地割・伝承を素材として「辺境の長者」（一九五八年）を叙述したのは石母田正であった。私たちはこのような先学のすぐれた問題提起を正しくうけとめてきただろうか。身のまわりの歴史を知りたいという人々の要求に対して、文献史料が残らないことを嘆くのみで答えようとしなかった態度は、はたして真の意味で学問的なものといえるのだろうか。文献の世界のみに閉じこもる中でえがかれる歴史像は、真の歴史像・民衆群像に一体どこ迄接近できるのだろうか。

かつて私は、「変貌する耕地景観と荘園史研究」という小文において、右のように書き出した。その時の問題意識は今も少しも変わるところはない。

歴史学は史料によって歴史事実を証拠だて、そして叙述する学問である。この場合史料となるものは、さまざまで、人々の過去のくらしを推察させ得るものは、全て史料となり得るといってよい。ある辞典の「史料学」の項には次のようにある。

「何が史料となりうるかは、歴史家がいかなる問いを発するかによって決まるのであり、問いに先立って既

成の史料が存在するのではない。」

けだし、しかり。まことに何が史料となり得るか、何が史料として有効となるのかは、歴史学を研究する主体が何を明らかにしようとするのか、何を問おうとしているのか、その姿勢によって決定されるのである。

私は本書において中世の人々の生活はいかなるものであったのか、それを問うこととする。

人々の生活、つまり中世の大半の人々の生活基盤であった荘園村落における生活である。本書の副題が「変貌する村の姿と荘園史研究」となっているのはこのためである。荘園史の研究には多様なものがあるが、本書の場合の研究視角は、荘園に生きた人々の生活の解明におかれる（以下荘園の概念には公領も含める）。

そして私は右の問いに答えるための素材（史料）として、現地の「景観」を選ぶこととした。「景観」に中世をさぐるのである。もちろん古文書・古記録も史料として重視するが、場合によってはそれらよりも現地の景観を重視するつもりである。この「景観」には地形・地名・各種の慣行・伝承・遺跡等が含まれる。

この景観は近年おどろくほど激変している。人は一生の間にさまざまに生活の変化を体験することだろうが、我々の世代、もしくは我々の父・母たちの世代ほどその変化が激しかったことは、過去千年の歴史にはなかったのではなかろうか。

とりわけ耕地景観及び農業生活に関してはその感が強い。我々が小学校の頃教わった日本の農業の特色は、労働力と肥料の多量集中投下による集約農業であり、例外は北海道における機械化農業であった。しかし今日の日本の農業は、大規模機械力の投入による、新しい、全く異なる農業となっており、農業主体はサラリーマンの兼業か、少数の篤志農家（ないし農協）が水田の所有者から委託を請けて行なうものとなってきている。

仮に日本の農業史（稲の耕作史）を、その技術によって時代区分するならば、(I)人力のみの時代、(II)牛馬耕と人力併用の時代、(III)機械による時代、とする三区分が可能かと思われる。我々の少年時代は牛馬耕の時代の最後に

属している。我々と同時代の少年たち、つまり戦後生まれの少年たちの中には牛馬とともに生活する中に育った人も、決して少なくはない。我々の少年時代の農業と、今日の機械化農業との間には、わずか三十年程の時間しか流れていない。一方牛馬耕の時代は平安・鎌倉以来、千年の歴史をもつ。そしてこの千年間における農業形態の変化は、近年の三〜四十年における変化よりも、はるかに少なかったのである。

先の農業の三時代区分に対応して、耕地も変化した。(I)人力のみの時代には、人力で作業が可能な広さの範囲に水田（畦畔）が作られた。水田はごく小規模なものであったが、その方が開田や作業、また保水の点でも有利であり、人力に対応した合理的なものだった。(II)牛馬耕の時代には、牛馬を利用した作業効率に適応した水田への作りかえが行なわれた。一反前後の水田が多くなり、条里制地割が全国で多く採用された。一度作りかえられた水田は、耕作権や水利権の関係で、安易に変更されることは少なく、保守的に維持されてきた。この時代が千年以上は続いた。(III)機械の時代になって、再び水田の作りかえが行なわれる。圃場整備・基盤整備事業である。水田は三反以上、一ヘクタールにも近い大区画となり、用水は自然流水ではなく、パイプライン敷設によるものとなり、蛇口をひねれば水が満たされるものになった。そして、(II)の時代に対応した中近世水田は消滅する。私はこの(II)の時代の消えゆく耕地景観を史料として重視する。

景観に中世をさぐる作業、それは今日に残された中世の痕跡を史料として採用していくことにはじまる。その痕跡が「現地」である。今日の「現地」は変貌が著しい。我々が求める「現地」は既に地図・空中写真・地籍図の中にしか残っていないものかもしれない。しかしそうした地図類にもまして重要なのはその「現地」に生きてきた(II)の時代の人々の生活である。その生活は古老たちの記憶の中には、はっきりと残っている。私はそうした生活をも史料としてとりあげてみたい。

さて人は時代の中にしか生きられない。時代の恩恵も受けるし、時代の制約も受ける。歴史学研究者もまた同

じである。歴史学研究は時代の中で行なわれるということを、研究者はおしなべて認識するべきであろう。研究は今日やっておかなければならないことを優先すべきであり、将来にでもできることは将来に委ねればよい。明日の学問・研究の自由を保証するための作業が、今こそ必要なのではないか。少なくとも私はそう思う。

本書はこの二十年余り、右のような問題意識のもとに、村々を歩いてきた筆者の記録であり、また、歩き、み、きく中で考えてきたことの報告である。拙い報告ではあるが、圃場整備や都市開発によって、すっかり変貌してしまった旧景観に、多くの歴史情報が刻まれていたということと、今でもその情報は収集可能であるということを、読者がこの本から読みとって下さるならば、著者の目的の一つは達せられたことになるだろう。